

定性評価の状況（令和 5 年度）

【日本画】

7本の展覧会に計23点の作品を貸し出した。

「激動の時代—幕末明治の絵師たち」(サントリー美術館、11点貸出)には、菊池容斎《蒙古襲来之図》などの重要作を出品し、内容の充実に貢献した。同展の骨子であった絵画史における幕末期から明治期への繋がり、近年特に研究が盛んなテーマである。当館コレクションが、研究の最前線で注目される作品を含むことを示す有意義な機会となった。

個展では、「生誕270年 長沢芦雪」(大阪中之島美術館4点、九州国立博物館6点貸出)が特筆される。掛軸2点、一双屏風2点(寄託品)を出品、いずれも芦雪の特徴をよく示す作品であることから両会場で注目を集めた。福岡会場では特別出陳として芦雪と同時代の画家による作品が展示され、当館からは池大雅《蘭亭曲水・龍山勝会図屏風》(重文)、円山応挙《木賊兔図》を出品した。他「山本栞谷と津和野藩の画人たち」(島根県立石見美術館、2点貸出)などに貸出を行った。

【日本洋画】

2本の展覧会に計2点の作品を出品した。

昨年度から巡回の「佐伯祐三—自画像としての風景」展(大阪中之島美術館)には、佐伯祐三の《ラ・クロッシュ》を、引き続き出品した。

また、「春陽会誕生100年 それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」(東京ステーションギャラリー、栃木県立美術館、長野県立美術館)に、岡鹿之助の《観測所》を出品した。同展は、1923年に発足した洋画団体「春陽会」の現在までの歩みをたどるものであり、洋画が日本の中で定着するにあたって春陽会が果たした歴史的役割が一望できる内容であった。本展は、翌年度、碧南市藤井達吉現代美術館に巡回し、《観測所》も引き続き出品を予定している。

【西洋】

国内では、以下のとおり、近代の作品3点を3件の展覧会に貸し出した。

20世紀の南仏における芸術家たちの交流や、まばゆい光の下で生み出された表現や技法に着目し、南仏で生み出された芸術の多様性を紹介した「芸術家たちの南仏—ピカソ、マティス、シャガールたちの楽園と逃避」展に、ポール・シニャックの《サン＝トロペ、グリモーの古城》を貸し出した。また、〈農〉、すなわち、田畑を耕して農作物を作ることに加え、農家の人々や農村の風景を含め、農業にまつわる現代アートなど、農業をとりまく諸々のイメージを紹介したユニークな展覧会「土とともに、美術に見る〈農〉の世界—ミレー、ゴッホ、浅井忠から現代のアーティストまで—」に、カミーユ・ピサロ《ライ麦畑、グラット＝コックの丘、ポントワーズ》を出品した。さらに、3人の文学者の関係および交流と彼らの美術への関心に着目した展覧会「芥川龍之介と美の世界 二人の先達—夏目漱石、菅虎雄」展に、オーギュスト・ロダン《パオロとフランチェスカ》を貸し出した。

また海外では、昨年度末から引き続き、フランスのリュクサンブル美術館で開催された「レオン・モネ、芸術家の兄弟にして収集家」展にクロード・モネ《ルーアンのセーヌ川》を出品した。

【現代】

5本の展覧会に計13点の作品を出品した。

宮脇愛子《作品12》を京都国立近代美術館の「Re:スタートライン1963-70/2023」に出品した。同館が1963～1970年まで毎年開催した「現代美術の動向」展をアーカイブ的な視点から掘り起こす展覧会に、本作が、1963年に同展に出品されたオリジナル作品として検証に役立った。

D I C川村記念美術館の「ジョセフ・アルバースの授業」、「カール・アンドレ 彫刻と詩、その間」に、

それぞれ1点ずつ各作家の作品を出品した。前者は日本初の回顧展で、後者は日本初個展となる。それぞれ、「授業」という補助線やテーマ設定により理解を促していた。

鈴木慶則の作品3点をフェルケール博物館の「水の絵 『幻触』と『幻触』以降の鈴木慶則」に出品した。当館所蔵の幻触時代の作品が出品されることで、鈴木の作風の変遷を示すことができた。

石田徹也は海外からの注目が高く、ガゴシアンギャラリー（ニューヨーク）の「Tetsuya Ishida:My Anxious Self」（石田徹也 不安な私）に4点を、ルイジアナ近代美術館（フムレベック）の「The Irreplaceable Human」（かけがえのない人間）に3点を出品した。後者は、創造性に注目した企画性の高いものである。

【センス・オブ・ワンダー】

日本、西欧の近現代作品を中心に、所蔵作品により、視覚だけでなく、触覚、聴覚、空間の広がりといった切り口で作品を味わうことを提案する企画で、美術館が近年求められている課題に応える企画の質の高さと、コレクションの質の高さの双方が印象づけられた。美術史的なテーマの展覧会では展示するのが難しい作品も展示できた点も評価できる。レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』を展覧会名に引用したのは、観客にもわかりやすく、動員に功を奏したのではないか。五感の相互の結びつきを取り戻そうとする本企画は、来館者の今後の鑑賞姿勢にも有益な提案をしたと考えられ、鑑賞者にとっては、それぞれの章のどれに興味をひかれるかを試す場ともなっていて、鑑賞者自身の自己理解にもつながったのではなかろうか。ICOM 京都大会で博物館の定義として提出された Museum as Cultural Hub「文化の交差する博物館」が今年の ICOM 大会で採択された。社会教育施設としてだけでなく、モノに接して楽しく学び、多様な価値が交差する場としての博物館という方向が提案されている。本展は、そうした動きにも合致する企画となっていた。(山梨委員)

コレクションを多面的に活用するだけでなく、従来の解説的教育論による展示ではなく、五感や共感覚を刺激し、構成主義的な視座から鑑賞者の経験や感性を開こうとする点で、内容の独自性や先駆性があり、研究面についていえば博物館展示論、博物館教育論的な観点から問題提起的である。各セクションに定番の名品が散りばめられており見応えがあったことに加え、今回のテーマによって掘り起こされた所蔵品もあり興味をひかれた。音楽を流す工夫、触れる展示の導入等も鑑賞者に親しみやすさを与えるのに役立ったものと思われる。全体として水準の高い展示だったとは言え、あくまで視覚中心の展覧会であったので、例えば身体を刺激するような体験型の展示、VR 展示等の割合を増やしたより楽しめる展覧会も今後計画できるかもしれない。また、自由に見てもらうことを主眼に解説や図録を省略したことは理解できるが、子供や鑑賞初心者向けの鑑賞のポイントを体得してもらうためのワークシートの配布、対話型鑑賞のセッションも何回かあると展覧会の趣旨がより実現できたかかもしれない。(栗田委員)

【大大名の名宝】

狩野派のコレクション（大大名細川家）の成り立ちがよくわかる展示構成であり、熊本以外でははじめて、狩野本流の展開が理解できるように工夫されていた。栄信と探信の活躍は、江戸狩野派を刷新したことを具体的に示しているが、それを作品で見せてくれたところが興味深かった。収集、展覧会活動、研究という三つの部門の充実がはかられており、今後とも継続されることが望ましい。

図録において、二人の学芸員の対談を載せ、展覧会の概要と趣旨をわかりやすく説いている。こうしたことは今まで美術館・博物館の図録では、あまりなかったことで、企画が収集・展示・研究というトライアングルで進められていることを明示している。このことを大変いいことであると考えています。

狩野派の仕事が、絵を描くことのみならず、殿様やお姫様のお絵描きに助力したり、工芸の下絵を描いたりすることもあると指摘している。興味深いことでもあるので、追究されるとよいと思う。(金原委員)

全 57 点の展覧会。永青文庫から 30 点、静岡県美からおそらく寄託品であろう 5 点も含め 27 点。細川家のコレクションとしては十分あり得る質量だが、それに匹敵する所蔵品をつくり上げた県美も立派なもの、それを痛感せしめる展示であった。歴代学芸員の努力と、それを支えた管理、県の理解とを称

えたい。中世一戦国期の作品が少ないのは、そもそも二つのコレクションに限定されているのだから仕方ないにしても、江戸期の狩野派の資料がこれだけなのか。折角の展覧会なので、もう少し永青文庫から出品してもらえればよかったように思うのだが。

狩野派の資料を静岡県美がこれだけ所蔵できたのは、伊豆が狩野派の本貫地？との認識があったからだと思うのだが、その点にまで見据えた展示をそろそろ考えてもよいのでは。新出資料も少ない分野で、結局新味のない内容になる可能性もなくはないが、狩野派研究での静岡県美の大きさからみれば、計画してもよい展覧会だと思う。

図録に落款印章の図版を載せるのは、もはや当然と云うところだろうが、外題、極め書まで入れてあるのは、現在の関心に応えたとして評価したい。ことに今回問題ある作品（とわたしは考えている）も思い切って展示したのだから、作品にまつわる客観的情報として、そうしたものを載せるのはやはりよいことだと思う。充実した静岡県美の狩野派コレクションを見るにつけ、今後とも研究に裏付けられたコレクションの充実を期待する。今回の展示でも近年収蔵された資料が実際に活用されているのは喜ばしい。（榊原委員）

【天地耕作】

まずは、1980年代の末頃から、「天地耕作」という名で、基本的に野外で制作・表現を行うという、独自の活動を行ってきた地元のグループを展覧会で取り上げた積極的な姿勢に敬意を表したい。このグループ本来の活動である山野中での制作活動を美術館の地の利を活かして裏山で新たに「天地耕作七」として実際に展開させただけでなく、館内には、祇園会の「山傘」を思わせるインスタレーション「白蓋（びゃっけ）」という新作を並べ、それらを中心に、「天地耕作」以前のメンバーの作品、今では見たり体験したりすることができない、それ以後の「天地耕作」シリーズの活動を、見応えのある写真と資料で紹介するという、配慮の行き届いた充実した展観であった。美術館という白い箱の外にこそ場を見出している芸術活動を美術館で紹介しようとしたこと自体が、チャレンジであったと思う。彼ら本来の発表現場においては、おそらく感じたであろう肉体の疲労感を伴う観照にまでは及ばないものの、想像で何とか補える場を設定してもらった、意義のある展観であったと思う。（潮江委員）

「天地耕作」は静岡県内で活動した作家であり、静岡県立美術館のAヴァリューでの展示も行っている点で、美術館とのゆかりが深い。村上兄弟と山本とでは制作の姿勢が異なっていることがインタビュー記事などから窺えるが、山本が60年代に静岡で活動したグループ幻触の影響を語っており、1980年代後半から約30年間静岡県内で制作を行った「天地耕作」を位置づける本展覧会は、静岡県立美術館ならではの企画である。

このたびの展覧会のための作品以外はすべて残されていない中で、これまでの制作活動を位置づけようとする企画は多くの困難を伴ったものと予想されるが、制作過程や作品を記録した写真の質が高く、見ごたえのある展示となった。会場は、美術館裏山の屋外作品と「天地耕作」プロジェクトの写真を編年的に展示する構成。第2室に3名が「天地耕作」として活動する以前の作品の写真資料が展示されており、3名各々の初期の興味を伝えることで、その後の展開の違いが理解しやすくなっていた。（山梨委員）

（『静岡県立美術館紀要』No. 39（令和6年3月31日刊行）掲載論文について）

貴家映子「ポール・シニャック作《サン＝トロペ、グリモアの古城について》—明るい廃墟の位置づけをめぐって」

本研究は、充実した基礎資料を駆使し、先行研究をふまえた、示唆するところの多い研究となっている。主題となる古城の景観がそのまま描かれたものではなく、意図をもって生成された作品であることを基礎資料で確認したことで、シニャックの本作品も、印象主義、新印象主義のリアリズムから象徴性、思想性を強調する方向への転換がなされた先に誕生した作品であることを確認・証明した。このことは、所蔵作品研究としてとても意義深い。印象主義、新印象主義の画家たちのリアリズムからの変節は「象徴主義」として説明されてきた。しかし、新印象主義の進歩主義的必然性を唱えた理論家シニャックもまた、同様の志向をもっていたことは、牧歌・楽園思想の復権が繰り返し問われてきた西欧では違和感がないにしても、日本国内の鑑賞者にはあまり認知されていない。こうしたギャップを、展覧会企画などを通して解き明かしていく努力がなされることを願う。（潮江委員）

多面的な視点からコレクションの価値を引き出そうとする、意欲的な問題提起的な好論考である。

「1 構図の成り立ち」に関しては、麓の教会を含めシニャック作品と近似する視点の現代の写真が、インターネット上にも見つけられるため、さらに考察を深められたい。「2 グリモアの特権的トポス」に関しては、同年制作の「ベルトアの松」と対に描かれた意味を絵葉書的な意味だけではなく、時間に関する画家の意識からも掘り下げるべきである。「3 愛書家シニャック」は興味深いのが、2と順序を変えた方が、より考察が深まったであろう。結びにおいて、素描 vs 色彩という、ルネサンスから続く問題と本作を接続した点は興味深く、対象が空間に溶け込む色彩派の延長上に印象派、新印象派、ボナールを捉えるならば、更に考察は発展していくことであろう。

地誌的な問題に関しては、現地調査が望まれよう。モチーフとなった「グリモアの古城」が古今どのように受容されてきたかも、引き続き調査される必要がある。総じて、各章がスケッチ的、問題提起的であるので、それぞれ深堀される余地がある。彩色とデッサンの調和の問題は、本作品の問題だけではなく、シニャック芸術理解の問題として、さらに考察を深め、独立した論考に発展させることもできよう。（栗田委員）

石上充代「木村武山《羽衣》について—天女の図像を中心に—」

木村武山の“羽衣”についてまっとうに絵を見て、自ら感じ、考えたことを天女の図像を中心に記しており、評価できる。仏画には規矩に則って表現がされており、新しい要素を盛り込むことがいささか困難であるが、そこに取り組み、細やかな表現技法を盛りこんで情感あふれる評言に結びつけたとしている。武山は大観、観山、春草の傍らにあって損しているところがあるが、独自の表現を見出しており、それを丁寧に分析している。大事なことであると思う。

古画の持ち味を解析し、現代に生かしていくことは、近代の作家作品を正しく認識するためにも重要である。継続して研究されることを期待する。（金原委員）

木村武山《羽衣》における天女の図像が、法界寺阿弥陀堂《飛天図》と薬師寺《吉祥天像》とを転居としていた事実を指摘、そこから《羽衣》における天女の様式的特質と武山が本図にこめた趣向を読み

解いた。その論旨は明解で、少なくともわたしには十分な説得力を持つ。佳論として評価したい。

近代絵画と云えば、ともすれば画家の創意工夫にのみ焦点が向けられるが、古画学習も実は彼らの制作の重要な手法であった。その点を指摘した論文や展覧会は散発的ではあるが、従来よりあった。今回の石上論文がそうした検討のさらなる呼び水となることを願う。(榊原委員)

新型コロナウイルス感染症の状況は5月7日をもって5類に移行し、令和5年度は予定のプログラムを全て実施することができた。定員の削減などの状況は続いたが、どの事業も中止の判断とはならなかった。

【一般向け】

小学3年生以上を対象とする「わくわくアトリエ」と中学生以上を対象とする「実技講座」は、各企画展の関連事業として行い、実施に際して担当学芸員からのフロアレクチャー等の解説をプログラムの一部に組み込んだ。この取り組みは参加者が展覧会の鑑賞のポイントをつかむことにつながり、制作にも役立つと考えられる。今後も続けることで、参加者のより深い鑑賞や、豊かな制作につなげたい。

「ねんど開放日」「えのぐ開放日」は、応募倍率が高い人気の事業である。後者は通例屋外での実施もあるが、外壁工事のため、室内のみでの実施となった。参加人数は最大40名と定員を絞っていたが、参加者の事後アンケートでは、そのことに対してもっと回数を増やしてほしいとの要望や、満足したとのご意見を数多くいただいた。

「ちょこっと体験」や「創作週間」、「ロダン館デッサン会」の参加者層について述べると、後半になるにつれ新規の参加者が毎回来られる状況が続いた。「ちょこっと体験」は好評で、準備した材料が時間内に尽きてしまう状況であった。また、館外の活動として、浜名湖で開催されたアニマルピック in 浜名湖でアウトリーチを兼ねて、「ちょこっと体験」（所蔵作品の動物画のぬり絵）を実施した。こちらも多めに準備した材料が時間内に尽きてしまうほど好評であった。館内で行っている「ちょこっと体験」とは異なり、屋外の会場で偶然制作に参加された人々が、気軽に作れる作品の出来に感動している姿が印象的であった。

【学校向け】

昨年度途中から開始した「ボランティアスタッフとの鑑賞」の広報は前年度に配布する美術館教室のしおりと当館ウェブサイトしか手段が無く、団体利用申込時に声かけしたものの、申込はなかった。他方で、県総合教育センターや各地区の図工美術会の教員向け鑑賞教育研修を実施することができ、鑑賞教育を中心に学校教育との連携を深めることができた。また、校外学習の一環として「ロダン館ななふしぎ」を希望する学校が、昨年度との開館期間の差をふまえても増加した。学校側の需要が回復してきたことによるのかもしれない。

「ねんど教室」や「えのぐ教室」も昨年度より多くの募集が集まり、台風の影響による1校が辞退したが、それ以外の申し込み団体は全て実施することができた。加えて、活動後に展覧会の観覧を希望する団体が増えていった。

「ロダン館デッサン・スケッチ・クロッキー」は、5つの学校が行った。美術科がある高校や中学校の美術部が主になるが、県東部や西部の地域からも参加があった。また、単学級の中学校が「ロダン館ななふしぎ」とスケッチを行うなど、他の実技室プログラムを連続して受ける学校や、他の美術館が休館をしていることから、当館へデッサン会を希望する学校もあった。

貸出教材の件数も上がり、特に貸出粘土やアートカードの貸し出しは多く、これからもその教育的効果を知る施設からの要請が増えることが予想される。

今後は、プログラムやイベントの回数を検討し、様々な活動を現在のニーズに合った教育プログラムへと変えて実施していく必要性があり、対応が急がれる。

これまでの地域等の連携をさらに深める経営を推進した。

地域・企業等

(1) 県立美術館ボランティア

・開館以来、美術館と来館者、美術館と地域の「かけ橋」としての役割を担っているボランティアについて、令和4年度までは任期を3年間としていたが、令和5年度よりボランティア体制を更新して任期を1年とし、更新可能なものとした。加えて、資格年齢を20歳から18歳に引き下げ、学生等の若者層にも参加しやすいものとした。

選考と研修の結果、令和5年度は125名の方、令和6年度は131名ををボランティアとして登録し、活動していただいている。

・活動方針：「来館者サービスの充実、美術館運営支援、地域連携推進」

(2) 有度山地域に立地する5施設、県立美術館、SPAC、日本平ホテル、日本平動物園久能山東照宮による「有度山フレンドシップ協定」による協働

・今後、企画展との連携事業を検討していく。

(3) 草薙商店会等との協働

・草薙地域で活動しているグループと連携して美術館前の広場でロダン・ウィーク「丘の上のマルシェ」を毎年開催している。

(4) ロダン・ウィーク

平成26年度、開館20周年を契機に開始した「ロダン・ウィーク」。工事休館中であった令和3年度を除いて毎年実施している。

(5) 企画展における企業等との連携による効果

館内レストラン「ロダンテラス」で県産品を使用した特別メニューを企画展ごと計4種類提供した。

ムセイオン静岡

谷田地域の文化教育7機関（県立大学、美術館、中央図書館、埋蔵文化財センター、SPAC、グランシップ、ふじのくに地球環境史ミュージアム）は、谷田の丘陵地帯及びその周辺地域の文化振興やまちづくりに貢献する目的で、「ムセイオン静岡」として相互協力し、文化の丘づくりを推進してきた。

毎年秋に開催している「文化の丘フェスタ」では、他機関と連携して「スタンプラリー」を実施した。

昨年度に引き続き、様々な広報手段を活用し、県内外への広報を推進した。

新たな取組

- ①（一財）静岡新食文化共創機構の企画するガストロノミーツーリズム関連ツアーに協力した。
- ② 浜名湖で行われた一般社団法人のイベントに参加し、専門学校とコラボした。
- ③「東アジア文化都市 2023 静岡県」のイベントとコラボした。
- ④静岡フィルムコミッションを通してロダン館において乃木坂 46 のミュージックビデオの撮影を受け入れたことで、実際の来館や利用者による SNS 発信につながり、ロダン館の魅力発信に大変有益だった。

引き続き実施した広報

- ①ホームページ、フェイスブック、インスタグラム、X（旧ツイッター）、YouTube による情報発信
- ②展覧会等イベント情報のマスコミへの資料提供（記者投げ込み、プレスリリースの利用）
- ③ポスター、チラシの配布、駅貼り、車内吊り
- ④県広聴広報課との連携（ツイッター、ラジオ、静岡駅地下街ショーケース電照看板、包括連携協定による広報物掲示・配架、P R T I M E S を利用した国内メディア向けオンライン・プレスリリースの配信）
- ⑤広報サポーターへの情報提供
- ⑥展覧会共催者（新聞社・テレビ局）等との連携
- ⑦企画展に関連する講演会・イベントを館内で行い集客を図った。
- ⑧美術館ニュース「アマリリス」の発行
- ⑨インターネットミュージアム等の美術館・博物館情報サイトで展覧会を P R した。
- ⑩事務局を通じた県内 3 大学の学生への広報
- ⑪旅行会社による美術館めぐりツアーへの協力
- ⑫大学の講義内での紹介
- ⑬館内レストランにおいて、企画展ごとに特別メニューの提供

県有文化施設と協働した広報

- ・毎年秋に谷田地域の文化教育 7 機関が「ムセイオン静岡」として連携して取り組んでいる「文化の丘フェスタ」で「スタンプラリー」を実施した。

県立美術館は、令和4年3月に「5ヵ年計画」を策定した。

計画では、美術館の基本理念（美術館の目指す姿）を実現するため、8つの実施方針を定めている。

その一つが「運営」であり、運営基盤の強化を目指すこととしている。

計画期間は令和4年度から8年度までの5年間であり、今までの主な取り組みは以下のとおり。（一部令和3年度に前倒し実施）。

（1）運営基盤の拡充（収入の確保）

- ・令和5年度の天地耕作展では、芸術文化振興基金の助成金交付を受け事業を実施した。
- ・予算外部資金の確保に向けて関係部局と調整し、ふじのくに応援寄附金（個人版ふるさと納税）を美術館基金への積立金とする仕組みを整え、令和5年度は234万2千円の寄附があった。
- ・地方創生応援税制（企業版ふるさと納税）では、10万円の寄附があり、館蔵品の取得費に充当した。

（2）企業との連携強化による運営の充実

- ・静岡県経営者協会会員の交流会に参加し、館長が講師となって講演を行うとともに、令和5年度の美術館年間スケジュールや企画展のちらしを配布した。
- ・令和6年度企画展への協力を仰ぐため、企業訪問を行い、信頼関係の構築を図った。